

「名前ってなんだろう」

河合雅雄（兵庫県立人と自然の博物館 名誉館長）



自然に親しむことの大切さを話すと、では自然に親しむにはどうすればよいかとよく聞かれる。「まず手初めに、身近な動植物の名を覚えなさい」ということにしている。それには頭の中で考えていてはだめで、とにかく自然の中に身をおき、自然を体感することだ。まわりを見まわすと、じつにさまざまな動植物にとりまかれていることがわかる。動植物とひとくくりにしないで、それらの名前を覚えることによって、それらの間に親しさの気持ちが湧いてくる。では、名前って一体何なのか、そのことを考えてみたい。

花見という年中行事とも言える風習を持っている民族は、白幡洋三郎さんの徹底した調査によると、広い世界の中に日本人だけという。観梅、月見、ヒバリの鳴合せ、秋の虫の声を聴くなど、自然を対象に観照する特異な風習を日本人は発達させてきた。

しかし、深い森の中を歩く、里山をぶらぶら歩く、道端の雑草の花を愛でるといった、ありのままの自然を楽しむという風習はない。その点、ヨーロッパの国の人は、森の中を歩くのが好きな人が多い。とくにドイツ人。北村昌美さんらの森林観の国際比較調査では、「休みにどこへ行きたいか」という質問に、ドイツ人の60%強が“深い森”と答えている。

彼らは森に行って何をしているかという、ただ森の中を歩いているだけである。歩くだけで何が楽しいのか、日本人には不思議に思う人が多いが、こういう質問にはドイツ人は、何を質問されているのかよくわからないのではないかと。森の中には、単なる木々の連立した空間ではない。いろんな樹種があり、それぞれの特長を主張し、草花が咲き、小鳥がさえずり、蝶が舞い、リスがつぶらな瞳でみつめ、鹿が駆けていくなど、さまざまな生きものが語りかけているみどり空間である。豊かな緑空間の中に身をゆだねることによって、平常の俗世界の煩わしさや憂さを忘れ、身心をフレッシュにするのである。彼らは皆、動植物の名を驚くほどよく知っている。たんに小鳥が鳴いているのではなく、クロツグミがさえずり、語りかけているのである。歩いていても、周囲の草花や小鳥の名前を知っているから、それらとは親密なチャンネルができていて、無言で語りかける草花と対話し、小鳥の声に声の持ち主が誰かを知っていて親しさを深めるのである。「ああ、小鳥が鳴いているな」と一瞬思うのと「クロツグミがさえずっている」と思うのとでは、後者の方が自然との親しさの距離がぐっと近くなることは明らかである。

私たちは、初対面の人とは名刺を交換する。お互いに名前を知ることによって、会話の密度が深まるからである。高齢になると物忘れがひどくなるのは誰も避けられないが、物の名は比較的よく覚えているに反し、特によく忘れるのは人の名である。しかも、当然知っていなければならない身近な人や歴史上の著名人の名を忘れることがある。不思議なことには、必要な時に一瞬の間に記憶が消されることがある。例えば、「オーストラロピテクスを最初に発見した南アフリカのウィットウォーターズ大学の解剖学の教授」とまで喋って、肝心の「ダート」の名が瞬間的に消えてしまったのである。この時の困りようは説明するまでもないだろう。瞬間健忘症と言っているが、記憶のファイルから、その時とり出せなかったのである。だから、その後には必ず思い出すことができる。悔しいこと限りない。記憶は三つの機能から成り立っている。記録、保持、表出の三つであるが、年がいくに従ってこれら三つとも能力が落ちていく。過去に記憶したものは、意外に脳に貯えられているが、表出の機能—つまり、記憶のファイルから瞬間に取り出す能力が衰えるのである。それが、特に人名だというのはなぜだろう。

日常、大変困ることが起こる。よく知っている人の名がどうしても出てこない場合である。その場限りの時はなんとか過せるが、後味の悪いことおびただしい。篠山口から大阪までの電車で、名前を思い出せない人に横に座られたときの悲劇的な状態は、まことに惨めなものだ。口調をあわせながら、この人の名は？ と頭の中では考え続けている。もうこらえきれなくなって、宝塚で途中下車をしたことがあった。そして、しばらくして気分が落ち着くと、まるで幽霊の出現のようにその人の名が浮かび上がるのだから、皮肉なものだ。思わずひとり笑いをしてしまった。

日本の霊長類学がユニークな発展をとげ、世界的に高く評価されたのは、その方法論にあった。その一つが個体識別である。ニホンザルの群れの構成メンバーの顔を覚え、一頭一頭に名を与える方法である。それによって個体間の社会関係が明らかになり、群れ社会の構造が解明された。また、母子きょうだいなど血縁関係がとらえられ、家系図が作製されるなど、これまでの方法論では予想もできない成果があがっていった。

名前を付けるという行為は、一頭一頭の個体の主体性と個性を認識することである。最初の試みは、宮崎県の幸島の群れでなされた。初めは客観性を重んじる立場から、各個体に番号をつけた。雄は1から始まり、1♂、2♂、3♂、雌は101から始まって、101♀、102♀というふうなのである。しかし、毎日サルたちと接していると、番号で呼ぶことに違和感をもち、名前をつけることになっていった。1♂はカミナリ、101♀はウバというふうなのである。番号で人を呼ぶ場合は、囚人や受験生などで、一人一人の個性を認めないということだ。サルたちに接していると、親愛感が育ってきて、番号で呼ぶことに帝国を感じるようになるのである。名前をつけることによって、はじめてサル一頭一頭の主体性を認めることになり、同じ土俵でのつきあいになるのだ。

この方法は、当初欧米の研究者から厳しい批判を受けた。擬人的で客観性を欠くというわけだ。しかし、個体識別の有用性は認め、サルを捕えて耳に番号をつけたイヤタグをつけるなどをした。だが、類人猿の本格的な研究が始まると、自然に親近感が湧いてきて、チンパンジーのJ、グドールがマウンテンゴリラのD、フォッシーらは、躊躇なく名前をつけるようになり、日本の方法論はようやく世界的に認知された。

もう多くを語る必要はないであろう。私が言わんとするところは理解して頂けたと思う。言葉（音声による言語活動）を持っているのは人間だけである。動物にはその能力はない。人は言葉によって外界を自己の内界に取り入れ、豊かにする。産まれたてのあかんぼうは、成長するにしたがって、自分を取りまくものに名前をつけることによって、アイデンティティーを構築していく。まず初めに覚えるのは、お母さんという言葉であろう。そして、取りまく人たちがものの名前を知ることによって、内界を構築し、アイデンティティーを確立していく。

ウォーキングが流行っている。高血圧、心臓病、糖尿病などの病気や老化防止によいと言わ

れる。それらはもっぱら肉体の健康に関する事柄であるが、自然を楽しむという精神面の健康をぜひ付け加えたい。それには初めに動植物の名を覚えることである。晩冬から早春にかけて黄色い花をつける木があるなど思うだけでなく、マンサク、ロウバイ、サンシュユと覚えるだけで、黄色い花への親しみができ、早春の風景が豊かさを増す。日本は昔から散歩、散策、漫步、そぞろ歩きなどの風習がある。それはウォーキングとは違って、四季のめぐりが見せる美しい風景を楽しみながら歩く行為なのである。周りの動植物の名を覚え、続いて雲や石ころの名まで広がっていけば、自己の内面の世界はぐーんと広がり、豊かさを増すだろう。そして、生きていく上に、自然の存在がいかに大切かを知ることができるのである。

